19.1.8 毎日新聞

火論 ka-ron

玉木 研二

安田講堂再びの冬

内科医師の堂垂伸治（どうたれしん じ）さん（70）は千葉県松戸市で診療所を開く。孤独死を防ぐ地域医療や在宅ケアの改善に腐心してきた。安否確認「あんしん電話」のシステム開発も手がけた。

志を同じくする全国の診療所のネットワークが12日午後1時半、東京大学の安田講堂で発表と意見交換の大会を開く。実行委員長の堂垂さんはこの講堂で開きたかった。

思い入れがある。

1968年、当時の医学部インターン制度に端を発した東大紛争は、教育の意義や社会問題と向き合わない大学、学者のあり方を問い、全学に広がる。学部を超えた全学共闘会議（全共闘）方式は各地の紛争で用いられ、学生が占拠した講堂は象徴と映った。

だが50年前の69年1月18、19日、機動隊が導入され、火炎瓶、投石、放水、催涙弾が冬空に交錯し、多数の逮捕者を出して講堂は陥落した。

堂垂さんは66年に入学、工学部に進んでいた。重工業系の大企業に進み、宇宙開発に携わる将来を思い描く「単純な理系少年」だった。

そして思いがけぬ紛争。全共闘に参加、人々とそれまでにない議論をし、本を読む。びっしり手書き文字で埋まった立て看板で情報を得た。

安田講堂陥落後、紛争は徐々に収束に向かった。堂垂さんは未組織労働者の組織化を考え、大手自動車工場に入るが、観念通りにはいかないことを知る。肉体労働についていけず、1年半で辞めた。

30歳になろうとしていた。大学は卒業したが夢は冷めている。とりあえず受験勉強をし千葉大医学部に入った。

そこで接した生身の患者、地域医療の現実に気持ちは変わる。医療はどうあるべきか。人の尊厳とは。後から思うことだが、大学紛争時に多様な討論をし、学ぼうとしたことが、ここに生きた。

紛争後、参加した各地の学生はその先の道を選んだ。

堂垂さんの言葉から引用すると、多くは既存社会に包摂されたが、一部は排除されたり、同化を忌避したりした。定められた人生を歩んだ人、人生を変えた人、魂を引き継ぐ人、沈黙の日々を過ごした人……。団塊の世代に重なるこれらの人々もほどなく「後期高齢者」になる。

安田講堂で開かれる大会のタイトルは「団塊・君たち・未来」。団塊の世代が駆け抜けて提起し取り組んだことを若い世代が受け止めて交流し、未来につなぐ発信の場に、という希望を込めたという。

問い合わせは電話047・394・0600。

（客員編集委員）

2019・1・8